

平成31年 **4**月の大阪森林便り

目次

- (1)  戦中戦後の木材業
 - (2)  木材輸出、41年ぶり高水準
 - (3)  成長へ中高層建築 有効
 - (4)  森林環境税法が成立
 - (5)  北米産丸太が上昇 3月積み 1年2か月ぶり
-  今月の木の話 指揮棒はヤナギ、オーケストラのなかの木材たち



(1) 戦中戦後の木材業

☆戦時中の様子

- ・木材統制法のもと、全国の木材業者は全て廃業。
- ・木材業者は皆、日本木材会社と各都道府県に設立された地方木材会社に統合。
- ・木材業者はその会社の従業員となりました。
- ・協定価格で販売され、切符の分しか買えませんでした。

☆終戦直後の木材流通

- ・終戦を迎えて日本木材会社も地方木材会社も混乱状態に陥り、木材もヤミで仕入れてヤミで売る状況でした。
- ・連合軍最高司令部（GHQ）は日本政府に対して日本木材会社と地方木材会社の解散を指令しました。
- ・木材統制法は撤廃され、木材業者の自主的な経営となりました。
- ・木材は船から荷揚げされた後、当時は馬車を利用する運搬方法が中心で、一部ではオート三輪と呼ばれる貨物自動車を利用。
- ・昭和28年頃までは木材の運搬は馬車が主流。昭和32,33年ごろからオート三輪が出始めました。
- ・戦後は木材が不足していて、流通する木材の本数や寸法もおおざっぱで、注文と違うことが度々でした。
- ・その後、寸法の正確さが優先されて、尺貫法からメートル法に変わってきました。

(2019年3月1日 大阪木材仲買協同組合新聞記事より抜粋・引用)



(2) 木材輸出、41年ぶり高水準

昨年 350 億円超す 米中摩擦余波も

- ・国産材の 2018 年の輸出額が 350 億円を超え、41 年ぶりの高水準となりました。
- ・中国向け輸出額は 9.3%増の 158 億円と大幅に増えたため。
- ・輸出額のピークは 1968 年の 414 億円。
- ・輸出額はここ 5 年で 2.8 倍に拡大。うち中国向けは 4.6 倍に。
- ・輸出額の 45%を中国が占めています。
- ・米国向けは前年比で 3 割、台湾向けは 2 割増えましたが、韓国向けは 1 割強減。



(2019 年 3 月 1 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

(3) 成長へ中高層建築 有効

- *林業の生産額は年間約 4500 億円。そのうち木材が 2500 億円。残りの 2000 億円はキノコ。
- *国内の森林約 2500 万ヘクタールが人工林で、このうち半分は植林から 51 年以上がたっています。
- *地形などの条件が似ているオーストリアと比較した場合、1M3 当たりの生産コストはオーストリアで 2400 円から 5500 円。日本は 5600 円から 9000 円。
- ・伐出しコストや流通コストが重荷に。林道整備が急務。
- *自給率は平成 29 年で 36%。

(2019 年 3 月 20 日 産経新聞記事より抜粋・引用)

(4) 森林環境税法が成立

- *「森林環境税」を創設する法律が成立。
- ・ 2024 年度から個人住民税に上乗せして 1 人当たり 1000 円を徴収。
- ・ 私有林の面積や林業就業者数などに応じて市町村に配ります。

(2019 年 3 月 28 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)



(5)  北米産丸太が上昇 3月積み 1年2か月ぶり

*北米産丸太の対日価格が1年2か月ぶりに上昇。

- ・伐採量が減少。
- ・2月積みと比べ1%上昇。
- ・米松小径木は横ばい。

(2019年3月29日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)



今月の木の話



指揮棒はヤナギ、オーケストラのなかの木材たち

*オーケストラの指揮者のタクトの多くは、柳の木。

- ・タクトの手元にはコルクがはめ込まれています。
- ・卓球のラケットの握りにもコルク。
- ・汗が出てもタクトやラケットが滑り落ちないようにするため。

*弦楽器の胴体の響鳴板になる甲板には、主にトウヒ（唐桧）。

*バイオリンの弓（ボウ）は、ブラジルのペルナンコブ材。

*クラリネットの胴は、グラナディアラ。

*ハーモニカのウッド部分はカエデの木。

- ・口から少々の唾液が入っても、膨れないのが好まれているから。

(日本林業調査会「木材に強くなる本」より抜粋・引用)

